街を豊かな歩行者空間で満たすための　倉敷市民会館街区の再生提案

History　街区のなりたちとその変遷

江戸中期　代官所の設置

1888
明治 21 年　紡績工場建設

1895
明治 28 年　工場東側に寄宿舎建設

1912
大正元年　分散式寄宿舎の建設

1945
昭和 20 年　紡績工場休止

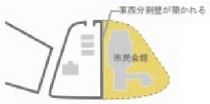
1972
昭和 47 年　市民会館完成

1974
昭和 49 年　アイビースクエア完成

1988
昭和 63 年　フローラルコート完成

2018
平成 30 年　エメラルドホール完成

～ 1971 年
代官所から工場・宿舎へと引き継がれた閉鎖的街区



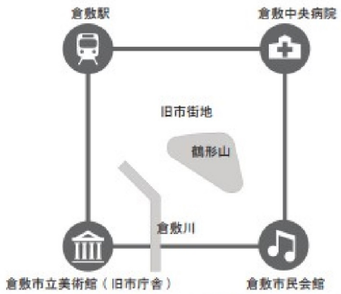
1972 年～
街区の東端が市民会館として街に開かれるも、
残された旧寄宿舎ゾーンを取り囲むために、
両者の境界上に新たな東西分割壁が築かれる

1974 年～
アイビースクエアの駐車場として利用するために塀による閉鎖範囲が一部変更される

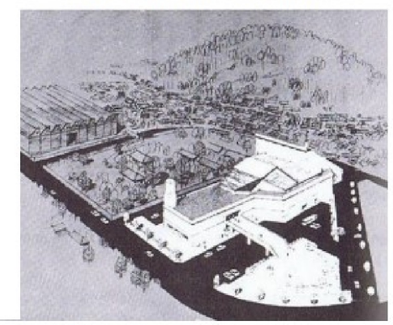
1988 年～
フローラルコートの開館により閉鎖範囲は縮小するも、官民境界には 130mの東西分割塀が残されたまま今に至る

■先覚者から次世代へと託された街へのメッセージ

城郭都市ローデンブルグの視察で大原總一郎氏が着想し、建築家・浦辺鎮太郎が描き実現させた、１ｋｍ四方の旧市街地の四隅を主要４施設によって囲みその内部を都市開発の圧力から守る「**四方櫓構想**」。その南東、辰巳櫓として位置づけられる倉敷市民会館には、堀（車道）を跨ぐ二重橋を渡り、大手門をくぐるような都市の門（City Gate）としてのデザインと、そこを進む歩行者デッキが用意された。その後浦辺氏の設計により順次整備されていったアイビースクエア、フローラルコートを加えた３施設は、この歩行者デッキの軸線の延伸によって一体的な街区を形成することが意図されている。
しかし、その構想の実現は両氏の没後は足踏み状態となり、その遺志は明確には後世には受け継がれぬまま、軸線を遮る長大な東西分割塀を残した街区はその時々の要請に沿って変化し続けている。
街の先覚者達が示し、推進してくれた、「賢明な配慮」に満ちた街づくりを引き継ぎ、能動的に継承することが現代の倉敷を生きる私達には求められているのではないか。



旧市街地を都市開発の波から守る四方櫓構想

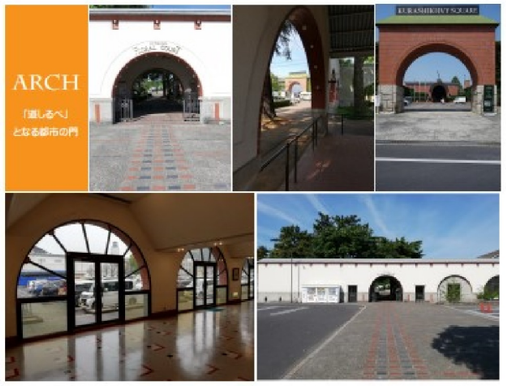


浦辺氏構想の市民会館計画図

都市の門としての市民会館と、街区を結ぶ懸け橋としての歩行者デッキが、その後整備されることとなるアイビースクエアとフローラルコート、そして鶴形山や伝健地区とともに描かれている。この絵からは、街区の一体化を実現し、それをもって旧市街地内への来訪者の流入を受け入れつつ、内部の街並みも守っていこうという浦辺氏の意図がひしひしと感じられる

Present State　街区の現状と課題

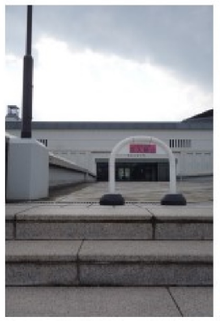
■街区の魅力　愛情が細部に行き渡った浦辺氏の建築デザインの宝庫



■残念な現状

文化都市らしからぬ貧しい歩行者空間

開演への期待感・高揚感、幕間や終演後の余韻をゆっくりと楽しむための文化的な外部環境とは程遠い、車道脇や駐車場内を足早に進むこととなる貧しい歩行者空間



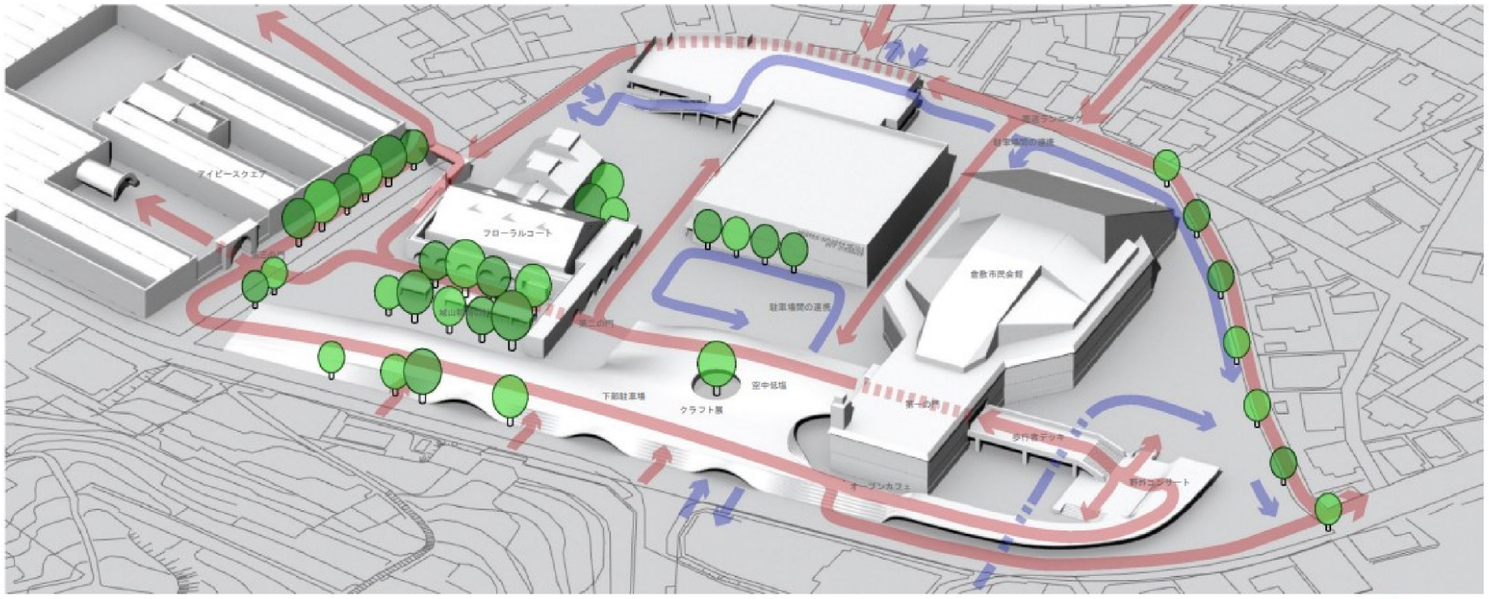
閉鎖性が高い街区の歴史を今も引きずり存在し続ける 130mの長大な東西分割壁が象徴する、来訪者へのもてなしの意識の不足と改善への不作為。通過する人々の記憶にすら残らない貧しい外部環境とその低利用が、市民側の看過をも生み出している

受忍限度を超える車社会の弊害

駐車需要に埋め尽くされる非連携、非効率な駐車場運営と、渋滞が常態化する道路に囲まれた街区の「陸の孤島化」が、市民による街区活用を阻んでいる。
市民会館の車利用者にとっての無料駐車場は、早い者勝ちの場所取りと、足早に通り過ぎるだけの通過点でしかない

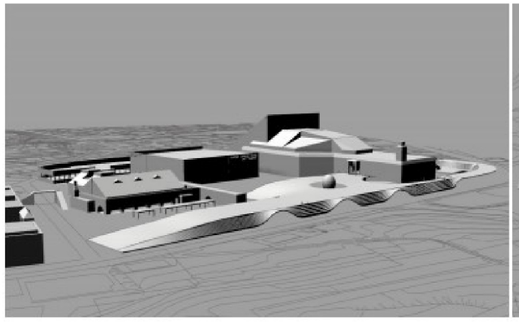
Next50 : Plan for the walkable city

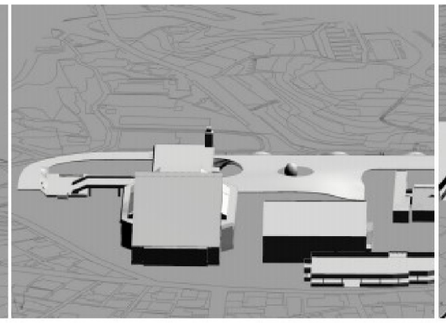
Future　Plan　駐車場を覆い街区を結ぶ「架け橋」

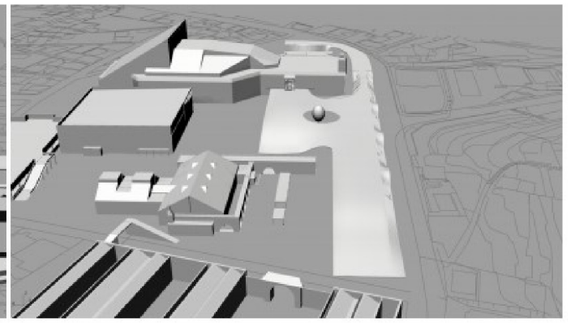


第一の大手門（市民会館）、第二のキウイ門（フローラルコート）、第三の正門（アイビースクエア）、スポーツ施設を結ぶ「架け橋」として魅力的にデザインされた市民公園は、カフェテラス、野外コンサート、クラフト展、周遊ランニングなど、市民の活発な野外活用を引き出し、適切に処理される交通動線と駐車場により、街区全体はウォーカブルなエリアへと生まれ変わる。

：人の流れ
：車の流れ







■Vision　街区に望まれる役割

●官民が連携した、求心力の高い市民公園

官民境界線のシームレス化をテコに、市民に愛され日々利用される、文化的で緑豊かな活気溢れる市民公園へと進化させたい。

●街の回遊性と健康増進に貢献する、ウォーカブルな街区

市民会館駐車場の有料化や官民駐車場の運用連携等による駐車稼働率の向上とその収益の歩行者環境への投資還元、ｽﾎﾟｰﾂｸﾗﾌﾞ利用者へ自転車やランでの来館を推奨するﾎﾟｲﾝﾄ制度の導入、 行政による広域交通計画の見直し等により、 現代の車社会が抱える課題を適切に克服し、 歩き、 佇むことが楽しくなる、 街全域の回遊性に貢献するウォーカブルな街区へと構造転換させたい。

●既存施設の資源を連携させた、地域の防災拠点

地区内の防災的資源（ｽﾎﾟｰﾂｸﾗﾌﾞの潤沢なﾌﾟｰﾙ水や入浴施設、 ホテルのﾘﾈﾝ、 被災者や物資の受け入れ可能な広い駐車場や県道）を防災協定締結等により効果的に連携させることで、 木造が密集し観光客も多い伝建地区の防災力を背後で支える拠点としたい。

●街区の潜在力を活かす、コンベンションパーク

2000 人収容の市民会館ホール、1000 人収容のエメラルドホール、500 人収容のフローラルコート、多数の会議室群や宴会場、宿泊施設を魅力的な外部歩行者空間により連携させ、 コンベンション誘致への訴求効果を向上させたい。

■Framework＆Schedule　体制と工程

●Working　Group

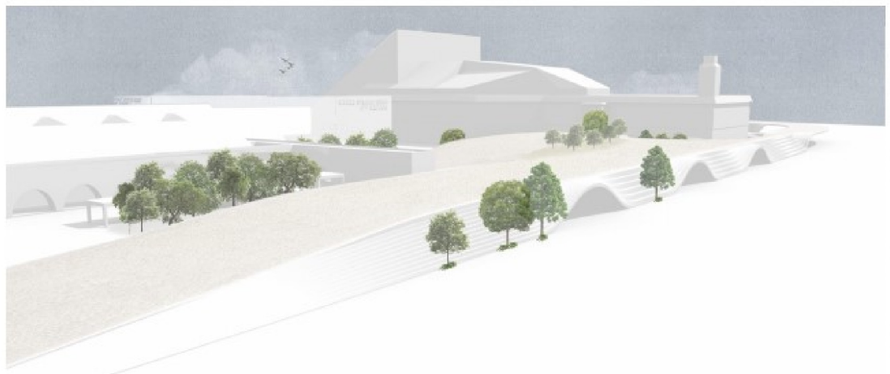
街区の魅力向上や課題克服に取り組むためのテーブルとして、 倉敷市、 クラボウ、 アイビースクエア、 グンゼスポーツ、 浦辺建築事務所、 地域住民組織等、 街区再整備の当事者となり得る諸団体が連携するための官民協議体（WG）を設置し、 目指す姿やテーマ、 問題点、 手順等を確認しつつ、 ひとつづつクリアして前に進む継続的環境を整えたい。

その上で、 防災、 景観、 歩行者動線の障害となっている東西分断塀の部分撤去（軸線上の範囲だけでも）など、 すぐにでも出来そうな改良の実施を通じて、 世論を動かし、 賛同者を増やしながら環境改善のための推進力を拡大させていきたい。

そして新たに生まれ変わった市民公園の運営については、 世界の先進事例に学びつつ、 その魅力を十分に引き出す活用と良好な維持管理のための、 公民連携の運営体制の構築も視野に入れたい。

●Next50

閉鎖的街区を切り開いてオープンした市民会館の開館50周年となる 2022 年を、 倉敷が真に歩いて楽しい街（Walkable City）への転換を目指し本格的に再始動する年と見定め、 開館100年の NEXT50 年のための準備をテンポよく開始したい。



東側正面入口へと回り込むように延びる空中庭園が、 開演への期待感を載せて来館者を市民会館へと誘う

市民会館東側の歩行者デッキから二階ロビーそしてステンドガラスへと延びる歩行者動線は延伸され、 フローラルコートのキウイ門へとまっすぐに舞い降りてくる

ステンドガラスの出窓状への改修で可能となる、左右から廻り込むように出入りできる市民会館二階西玄関の新設により、市民が集い憩う空中庭園と市民会館は直結させる

仁科建築設計事務所＋TREE FARM